

# 金沢星稜大学人間科学会 学術講演会 『オリンピックフォーラム』

Foundation of the Society of Human Sciences in Kanazawa Seiryō University  
“The Forum of Olympic Games”

大森重宜抄録  
Summarized by Shigenori OHMORI

金沢星稜大学人間科学会は、スポーツ文化の普及ならびに地域のスポーツ振興や競技力の向上に寄与することを目的に「オリンピックフォーラム」と題した学術講演会を開催した。

講演会の対象は、本学学生のほか、地域のスポーツ指導者や様々な競技に取り組む中高大学生とした。

第一部では スポーツ社会学、バイオメカニクス(野球)、コーチング(陸上)の各分野(視点)から、北京オリンピックにおける競技成績等を分析することにより、日本が世界で戦うための方策を提示した。

第二部では、特別講師の朝原宣治氏(北京オリンピック銅メダリスト)が、自身の競技人生を振り返りながら、世界トップレベルで競い合うために競技者として必要な心構えや姿勢について講演した。

日時：平成20年9月26日(金)17:30~19:00

会場：金沢星稜大学 稲置記念館5階大ホール

共催：金沢星稜大学経済学会、金沢星稜大学総合研究所

後援：石川県教育委員会、金沢市教育委員会、石川県体育協会、石川陸上競技協会、北陸放送、エフエム石川、大塚製薬



## 第I部

### フォーラム『北京オリンピックをふりかえる』

田島 良輝：スポーツ学科講師／スポーツ社会学  
演 題：変わりゆくオリンピック  
—ナショナリズム、アマチュアリズム、コマ  
—シャリズム—



島田 一志：スポーツ学科准教授／  
バイオメカニクス・野球  
演 題：数字で見る星野JAPAN



杉林 孝法：スポーツ学科講師／  
スポーツ科学(コーチング)  
演 題：勝敗を決する1%  
—競技達成度で振り返る陸上競技—



※3名とも当日の演題から原稿の表題は変更しています。

# 変わりゆくオリンピック —商品としての北京オリンピック—

Changing Olympics

—Olympiad Games Beijing to commercialize—

田島 良輝  
Yoshiteru TAJIMA



## 1. はじめに

2008年8月、言葉、人種、宗教の異なる204の国と地域から選手が集まり、4年に1度のスポーツの祭典、オリンピックが北京で開催された。

社会の現実から一時離れ、17日もの間、世界中の人々がテレビ（近年ではインターネットも考慮に入れなければならないだろう）を通して同じ時間と感動を共有する、このようなイベントは他にあまり例をみない。メディアと結びつき巨大化したオリンピックは、スポーツ愛好家だけで完結するいちスポーツイベントとして捉えるのではなく、宗教、政治、経済といった社会に影響を与える、あるいは与えられる存在として、認識する必要があるだろう。

1896年、ピエール・ド・クーベルタンが創始した第1回大会から数えて北京オリンピックは112年目・29回目<sup>1</sup>を迎えた。この間オリンピックは、ときどきの社会情勢に応じて、さまざまに変容を遂げてきた。初期のオリンピックは古代オリンピアの宗教的な要素も色濃く残されていたし、ベルリンオリンピック（1936）に見られるナチスの政治利用、人種差別問題に端を発したモントリオールオリンピック（1976）でのアフリカ諸国ボイコット、東西冷戦の影響を受けモスクワ（1980）、ロサンゼルスオリンピック（1984）で起きた両陣営のボイコット合戦など政治に大きな影響を受けた時代も長く続いた。では、現在のオリンピックは何にもっとも影響を受けているのだろうか。それはビジネス

であろう。アマチュアスポーツの祭典であったオリンピック大会だが、運営費の増大など開催都市の負担は莫大なものとなり、1984年の夏季オリンピックに立候補したのはロサンゼルス、ただ1都市であった。そこで、オリンピックを統括する国際オリンピック委員会（以下IOC）は決断を迫られることになる。アマチュアリズムを堅持するために規模の縮小を選択するのか、それとも規模の拡大を選択する代わりに商業主義の導入を認めるのかという決断である。そして、IOCは後者を選択した。オリンピックに民活方式を導入し、商業主義路線に舵をきったのである。

## 2. 商品化するオリンピック

### 2-1. オリンピックビジネス

前述のとおり、オリンピックが商業主義路線へ転換する端緒となったのは1984年のロサンゼルスオリンピック（以下ロス五輪）であった。ロス五輪組織委員長のピーターユベロスはオリンピックをマーケティングの対象物として捉え、放映権料入場料収入スポンサー収入ライセンス料の4点において、徹底的な収益拡大方策をとった。特にの放映権料とスポンサー収入については「権利」という概念を上手に活用し、放映権における独占放送権方式、スポンサーシップにおける1業種1社方式という新しい制度を導入した。その結果、テレビ放映権料は前回大会のおよそ3倍にあたる2億2500万ドルに跳ね上がり、スポンサー収入においても大幅な収益拡大を得ると同時に、現在に至るスポンサーシップシステム、オリンピックパートナープログラム（以下TOP）を構築する契機となった。

### 2-2. オリンピックとスポンサーシップ

本稿ではスポンサーシップに焦点をあてて論を進めていくが、そもそもオリンピックのスポンサーシステムとは一体どのような商品なのだろうか、ここではTOP企業の権利と機会についてまとめておきたい。

TOPとはIOCのスポンサーシッププログラムであり、夏季&冬季オリンピックを4年ワンセットで商品パッケージ化したものである。このプログラムがスタートしたのはソウルオリンピック（1988）とカルガリーオリンピック（1988）を対象としたTOPであり、コカコーラ、コダック、VISA、3M、フェデラルエクスプレス、Time、フィリップス、ブラザー工業、松下電器産業の10社が最初のワールドワイドパートナーとして契約した。このTOP企業には「あらかじめ与えられた商品カテゴリーでの独占的なマーケティング権利と機会が与えられ」<sup>ii</sup>（原田，2004），たとえばコカコーラ社であればノンアルコール飲料、コダック社であればフィルム全般といった具合に1業種1社の方式を採用し、

企業のスポンサーメリットを厳重に守っている点が特徴的だ。パートナー企業は契約期間の4年間で約50億円近くのスポンサー料を支払うことで、ワールドワイドなマーケティング機会を得ることになる。具体的に行使できる権利を以下の表1にまとめた。

表1. TOP企業の権利と機会

<ul style="list-style-type: none"> <li>●五輪マークを含むオリンピック関連商標の使用権</li> <li>●オリンピックにおけるホスピタリティー機会の提供</li> <li>●オリンピックの放映番組における優先的な広告掲出</li> <li>●大会会場における商品販売と商品の展示機会</li> <li>●アンブッシュ・マーケティングからの防御<sup>iii</sup></li> <li>●幅広いオリンピック・スポンサーレコグニション・プログラムを通しての協賛企業の告知</li> </ul>
---

(原田, 2004<sup>iv</sup>を筆者が一部加筆・修正)

オリンピックのスポンサーシップは、このように単なる広告看板掲出だけではなく、国際的な市場を持つ企業にとってマルチユースなコミュニケーションツールとして商品化<sup>v</sup>されている。

商品化するオリンピックについては行き過ぎたビジネス化によって生じる諸問題を指し、根強い（あるときは感情的な）批判もあるが、一方でIOCのマネジメントが洗練されたことで「行動の果実を確実に産出し、それらをオリンピック・ムーブメントへ配分しつつ、IOC憲章に定められた目的の達成を成し遂げている」(桂川, 2005)<sup>vi</sup>という事実も<sup>vii</sup>忘れてはならない。スポーツと商業主義については、まとめて若干の考察を付したい。

### 2-3. 北京オリンピックのスポンサービジネス

オリンピックのマーケティングはIOCが直接管理する形態と、IOCの方針に従い開催地の組織委員会が管理する形態との2つに分けられる。テレビやインターネットなどの放送権、TOPワールドワイドスポンサー契約、IOCの公式サプライヤー及びライセンスプログラムはIOCの直接管理であり、組織委員会が管理・運営できるのは国内スポンサー権、入場券販売権、ホスト国内のライセンスプログラム権に限定される。北京オリンピックの場合も同様で、IOCが契約するワールドワイドパートナー（協賛金約50億円で松下電器産業、GE社など12社が契約）と北京オリンピック組織委員会（以下BOCOG）が集める国内スポンサーの2本立てとなっている。BOCOGは国内スポンサーを公式パートナー（協賛金50億円以上／中国銀行、アディダス社、中国石油など11社）国内スポンサー（協賛金20億円／バドワイザー、青島ビールなど10社）独占サプライヤー（協賛金4億円～5億円／思念食品、スニッカーズなど15社）非独占サプライヤー（協賛金2億円～3億円）／コクヨ、マイ

クソフト中国、ユニパックなど15社)の4段階に区分し、スポンサービジネスを展開した。<sup>viii</sup>

### 3. まとめ

これまでオリンピックを対象にスポーツマーケティングの事例について記述をしてきたが、最後にオリンピックという巨大スポーツイベントの商品特性と商品構造を整理し、若干の考察を付し、本稿のまとめとしたい。

広瀬 (2002) は、メディアとしてのスポーツが他のメディアと比べて際立っている商品特性をリアリティ、ビジュアルリティ、広い訴求対象の3点と指摘している。リアリティとはスポーツは報道という側面も持つためテレビのニュースや新聞で取り上げられることも多く、量的にも質的にも露出を確保できるという点、ビジュアルリティとはスポーツは動きが多く、ダイナミックなため映像向きのソフトであるという点、広い訴求対象とはスポーツは視覚に訴えやすいため、ノン・バーバルコミュニケーションとして言語、国境、人種の壁を超えることが容易であり、かつ趣味性が低いため年齢に関係なく共通の話題となりやすい点が特に優れた点だと指摘している。そこで、筆者は以上の特性を備えたスポーツイベント（オリンピック）の商品構造を以下の表2にまとめた。

表2. オリンピックの商品構造

<ul style="list-style-type: none"> <li>■提供する商品（サービス）</li> <li>☞ オリンピックの興業権、肖像権および派生する諸権利</li> <li>■提供する人／組織</li> <li>1) 競技団体；IOC、大会組織委員会、NOC</li> <li>2) チーム；競技ごとの出場チーム</li> <li>3) 個人；選手</li> <li>■享受する側</li> <li>☞ スポーツファンとスポンサー</li> </ul>
---

スポーツイベントという商品を提供する側と享受する側の双方の理解を高めることで、市場は創造され、拡大していく。このようにスポーツイベントという商品の付加価値を高めていく作業が、スポーツマーケティングである。

もちろんスポーツが商品化していくことでプラスの側面とマイナスの側面、双方があらわれる。もっとも大きなプラス面は、安定した資金を得ることでスポーツ環境が質的にも量的にも向上していくことであろう。オリンピックの収益によって、経済的に恵まれていない国でもスポーツの普及が可能になった。一方で商品化が行き過ぎたことで生じるマイナス面といえば、ドーピングの問題をあげないわけにはいかない。

ただ、ここで重要なことはスポーツがビジネス化するこ

と、それ自体は決して批判されることではないという点である。問題なのは行き過ぎたビジネス化であり、商業主義に陥ってしまうことである。本来、正しいビジネスは利害の異なる人・組織を調整し、Win-Winの関係を構築することであり、決してファンやスポンサーから見放されてしまうような取組みであるはずはない。スポーツの価値を高めることは、ビジネスの側にいる人・組織にとっても重要なことであり、そのためには（特にスポーツの世界で根強く残っている）ビジネス化=悪と考えるのではなく、しっかりとスポーツビジネスをすること、それこそが、今後のスポーツの普及、発展に向けた近道になるのではないだろうか。

## ■註

- i) 夏季オリンピック大会は過去3度、戦争による開催が中止されたことがある。それは1916年のベルリンオリンピック(ドイツ)、1940年の東京オリンピック(日本)、1944年のロンドンオリンピック(イギリス)の3大会であった。幻のオリンピックとなった1940年東京オリンピックについては、橋本一夫の「幻の東京オリンピック」(NHKブックス)に詳しい経緯がまとめられている。
- ii) 原田宗彦著、「オリンピックとスポンサー」、『ライトナウ』、税務経理協会、vol8；p45、2004年
- iii) アンブッシュ・マーケティングとはオリンピックやワールドカップなどのイベントにおいて、公式スポンサー契約を結んでいない企業や団体が、無断でロゴを使用するなど、会場内や周辺で便乗して行う宣伝活動のことをいう。北京オリンピックでは、オリンピックに便乗した誤解を招く広告看板が多いとの批判を受け、政府系の中国広告協会が公式スポンサーの権利を守るという声明をだすという事態にもなった。
- iv) 前掲ii)
- v) オリンピックと並び巨大スポーツイベント化したイベントとしてサッカーのワールドカップがある。両者のスポーツマーケティングのシステムは似通っているが、スポンサーシップについてはいくつかの大きな違いがある。もっとも大きな違いはスタジアム内に協賛企業の看板を掲出できるか否かという点である(ワールドカップは可能であるが、オリンピックではできない)。その理由は、これまでワールドカップサッカーは放映権料が少なくスポンサー収入を主な収入源としていたからであり、逆にオリンピックは放映権料を主な収入源としていたため、テレビ局のスポンサーを考慮して会場内

での協賛企業の社名・ブランド名の露出を抑えていたと考えられる。しかし、2000年頃から放映権、スポンサー収入の収入バランスはFIFA、IOCともに均衡化しつつある。

- vi) 桂川保彦著、「アテネオリンピックを振りかえる ホームカミングオリンピックゲーム、アテネ大会の検証と五輪の行方—ビジネス化は加速度を増し、精神は減びるのか—」、『スポーツ産業学研究』、日本スポーツ産業学会、第15巻1号；p2、2005年
- vii) IOCのミッションや行動目標(ここでは桂川が翻訳したアテネ大会のFACTSHEETの内容をまとめた)は、オリンピック・ムーブメントへの安定した財政貢献をすること長期持続的なパートナーシップを通して実質的な支援を生むこと歳入はオリンピックファミリーを通して公正に配分されることオリンピックゲームの財政と運営を安全に行うことオリンピックゲームにおける不正な商業主義を防止すること宣言している。
- viii) これらの契約金額は2007年9月時点のものであり、週刊ダイヤモンド・第96巻30号/特大号(2008年8月2日)、「特集スポーツ&マネー丸ごとランキング」を参考に作成した。

## ■参考文献、資料(雑誌)

### 参考文献

- 1) 桂川保彦著、「アテネオリンピックを振りかえる ホームカミングオリンピックゲーム、アテネ大会の検証と五輪の行方—ビジネス化は加速度を増し、精神は減びるのか—」、『スポーツ産業学研究』、日本スポーツ産業学会、第15巻1号、2005年
- 2) 原田宗彦著、「オリンピックとスポンサー」、『ライトナウ』、税務経理協会、vol8、2004年
- 3) 広瀬一郎著、『新スポーツマーケティング—制度変革に向けて—』、創文企画、2002
- 4) 宮内孝知著、「第23章スポーツ・メディアに起因する問題」、『教養としてのスポーツ科学』、大修館書店、2003

### 参考資料(雑誌)

- 1) 「週刊東洋経済」、第6122号、2008年1月26日号
- 2) 「週刊ダイヤモンド」、第96巻30号、2008年8月2日号

本稿は2008年9月26日に行われた金沢星稜大学人間科学部・人間科学会学術講演におけるフォーラム「北京五輪を振りかえる」内で発表された演題「変わりゆくオリンピック-ナショナリズム、アマチュアリズム、コマーシャルリズム-」の内容に加筆および修正を加えたものである。

# NOIを用いた北京オリンピック 野球競技日本代表チームの検討

A examination of Japan baseball team at games  
of the XXIX Olympiad by using NOI.

島田 一志  
Kazushi SHIMADA



## 1 はじめに

2008年8月に中国の北京で行われた第29回オリンピック競技大会（以下、北京五輪とする）の野球競技において、日本チームはメダルの獲得を期待されたものの目標を達成することができず4位に終わった。

野球は、試合に用いる競技場の大きさに対する守備側の選手の数が少ないこと、また試合に用いられるボールが小さくかつ高速で移動するなどの理由から、偶然が勝敗に大きく影響するスポーツである。そのため、試合の勝敗を決定した要因としてひとつのプレーが注目される場合が多く、ことに五輪のように短期間で開催される大会においてこの傾向はより顕著となる。

いっぽう、野球におけるチームおよび選手の競技力を評価する方法としてセイバーメトリクスとよばれる数学的手法がある。セイバーメトリクスはおもに米国で発達した手法であるが、近年では日本国内のプロ野球に関する分析にも用いられつつある。しかし、セイバーメトリクスを短期間の大会の分析に用いた例は、川村と中村（2007）による選抜高校野球大会および全国高校野球選手権大会の試合に関する分析の他にはあまりみないようである。

本稿では、算出および引数の検索が容易なセイバーメトリクスの指標を用いることにより、北京五輪における日本チームの試合の結果について検討する。

## 2 出場各国の得失点

表1は、北京五輪に出場した各国代表チームの1試合あたりの得点、失点（※1）およびその差を示したものである。なお、得点および失点の算出にあたってイニング数は考慮しなかった。

日本チーム（以下、各国チームについて“チーム”を省略）の1試合あたりの得点は4.0点で、優勝した韓国（5.6点）とは1.6点、2位のキューバ（7.1点）とは3.1点、そして3位のアメリカ（5.6点）とは、1.6点の差がそれぞれみられた。いっぽう、失点についてみると日本は3.1点であり、メダルを獲得したキューバ（3.1点）およびアメリカ（4.0点）と等しいか小さかった。また、韓国（2.9点）よりはやや大きいもののその差は1点に満たないものであった。北京五輪における日本の守備は、2試合連続での失策の出現および救援登板した投手の被安打などから決して良好なパフォーマンスではなかったイメージがあるが、大会全体を通して考えると必ずしも他チームに劣るものではなかったといえよう。

1試合あたりの得点から失点を減じた得失点差は日本は0.8点であり、韓国（2.7点）、キューバ（3.9点）、そしてアメリカ（1.6点）のいずれのチームよりも小さかった。得失点差を大きくする方法のひとつとして失点を現状よりも小さくする方法が考えられ、この方法は日本における野球の現場にも従来から存在する「チーム作りはまず守備能力を高めることから始める」という考え方も一致する。しかし、打者の打撃および走者の走塁の技術が著しく進化している現代野球において現時点でメダル獲得国と比べても遜色のない失点をさらに減少させることは、やや困難であることが考えられる。本稿の以下では、メダルを獲得した3チームにくらべ劣っていた1試合あたりの得点に関して検討を加えていく。

表1. 北京五輪出場各チームの1試合あたりの得失点

順位	チーム	得点( A)	失点( B)	A - B
1	韓国	5.6	2.9	2.7
2	キューバ	7.1	3.1	3.9
3	米国	5.6	4.0	1.6
4	日本	4.0	3.1	0.8
5	台湾	4.1	4.7	-0.3
6	カナダ	4.1	2.9	1.3
7	オランダ	1.3	7.1	-6.5
8	中国	2.0	8.6	-7.2

### 3 出場各国および日本チームメンバーの得点能力の検討

次に、各チームおよび日本チームの各メンバーの得点に関する技能（以下，“得点力”とする）について検討する。本稿では、得点力の指標としてNOI (new offensive index) を用いた。NOIは、米MLBの球団が選手を獲得する際などに使用される指標であり（ルイス，2004），長打率および出塁率が高いほど数値が大きくなる傾向にある。また，算出に用いる式がきわめて簡便であること（※2），入力する引数を新聞記事およびネット上等から容易に入手できる等の長所がある。なお，本稿において用いた引数は北京五輪の各試合についてはnikkansports.com. (2008)，2008年NPBペナントレースの試合については日本野球機構オフィシャルサイト (2008)からそれぞれ引用した。

図1は，各チームのNOIと1試合あたりの得点の関係について示したものである。両者には強い正の相関関係 ( $r=0.985$ ,  $p<0.001$ ) がみられた。このことから，短期間で行われるオリンピックにおいてもチームおよび選手のNOI，すなわち長打率および出塁率を高めることでより多くの得点を期待できることが示唆されよう。

表2は，2008年7月29日時点でのNPBペナントレースにおけるNOIを日本チームの各メンバーについて示したものである。北京五輪の試合において失策を記録した選手は，5番目に高いNOIを示しており，チームの得点力を高めるという観点から考えると指名打者としての起用を一考する余地はあるもののスターティングメンバーに加えることに関しては妥当であるといえよう。また，筆者が2008年9月の時点におけるNPBペナントレースでのNOIを算出したところ，上位3名の高い選手が代表メンバーに選出されてい

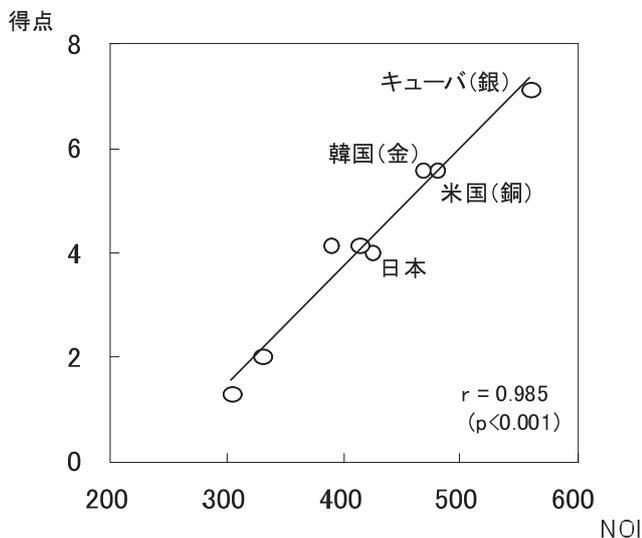


図1 北京五輪出場各チームの1試合あたりの得点とNOIの関係

た。NOIは，長打力よりも出塁率の高い選手の数値が大きくなる傾向にあるため，“スモールベースボール”すなわち選手の走塁に関する技能を重視することを標榜した星野ジャパンとしては適切なメンバーを選出していたといえよう。いっぽう，同じデータを用いて筆者が算出した結果では4番目から9番目までの選手がメンバーに加わっておらず，今後の国際大会でメダルを獲得するためには，この点について再検討の余地はあると考えられる。

表2. 日本代表チーム各選手の2008年7月29日時点でのNPBペナントレースにおけるNOI

選手	NOI
青木 宣親	621
中島 裕之	606
村田 修一	538
森野 将彦	578
GG佐藤	568
稲葉 篤紀	560
新井 貴浩	537
西岡 剛	522
里崎 智也	493
宮本 慎也	490
阿部慎之助	484
川崎 宗則	482
矢野 輝弘	417
荒木 雅博	395

### 4 五輪大会とペナントレースの関係

図2は，日本チームの各メンバーの北京五輪およびNPBペナントレース（2008年7月29日時点）におけるそれぞれのNOIの関係について示したものである。両者に有意な相関はみられず，このことは北京五輪においてペナントレースと同じ高さのパフォーマンスを発揮できなかった選手の存在を示すものと考えられる。

3. でみたように，自チームおよび選手の長打および

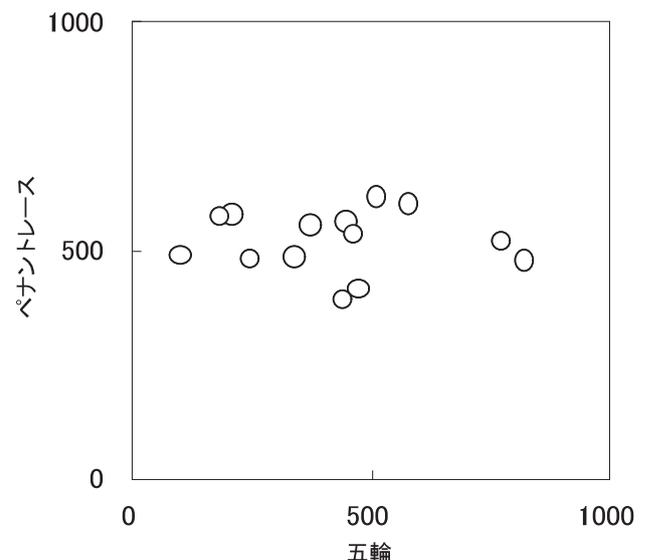


図2 日本チームの各メンバーにおける北京五輪および2008年7月29日時点でのNPBペナントレースの各NOIの関係。北京五輪の試合に出場した選手のみ示してある

出塁等を高めることにより試合での得点を増加させることは、五輪大会においても試合に勝つための重要な要素である。したがって、このような短期間の大会においてペナントレースと同様のパフォーマンスを発揮できる選手を代表メンバーとして選出するための方策を検討することは、日本が国際大会でより上位の結果を得るための課題のひとつといえるであろう。

このことについて、筆者は第29回オリンピック競技大会(1984年、ロサンゼルス)の野球競技において日本代表として金メダルを獲得した元選手と会話し、際、「オリンピックのような短期決戦においては、攻撃においてはきわめて積極的な選手が力を発揮する」との意見を拝聴した。このような、オリンピックなどの試合において優れた結果を残した選手および指導者の感覚について科学的指標を用いて示し、たとえば「積極的な選手」とはどのようなプレーを行う選手を指すのか、あるいは「力を発揮する」とはどのようなパフォーマンスを指すのかについて定量化することは、現場の経験を裏付ける、あるいは検討を加えるという観点において有意義であると考えられる。現場の優れた感性を客観化し、いっそう有益なものとするのが、今後のスポーツ科学の役割のひとつといえるであろう。

本稿は2008年9月26日に行われた金沢星稜大学人間科学部・人間科学会学術講演におけるフォーラム「北京五輪をふりかえる」内で発表された演題「数字で見る星野ジャパン」の内容に加筆および修正を加えたものである。

## 注

- ※1 投手およびチームの守備力を検討する指標としては自責点防御率を用いる場合が一般的であるが、本稿では失策などの投手以外の守備者による失点を含めて検討するため、また各チームの得点についても9イニングあたりではなく1試合あたりとして算出しているため、1試合あたりの失点を用いている。なお、本稿においては、1試合あたりの失点と失点防御率の両者ではチーム間の順位は等しかった。
- ※2 NOIの算出方法は以下のとおりである。

$$\text{NOI} = (\text{出塁率} + \text{長打率} \div 3) \times 1000$$

出塁率および長打率は以下の式によって求めた。

$$\text{出塁率} = (\text{安打} + \text{四球} + \text{死球}) \div (\text{打数} + \text{四球} + \text{死球} + \text{犠飛})$$

$$\text{長打率} = (\text{安打} + \text{二塁打} + \text{三塁打} \times 2 + \text{本塁打} \times 3) \div \text{打数}$$

なお、得点力の指標としては他にRC27などがあるが、算出の過程がやや煩雑なこと、また併殺打や盗塁死などの詳細な引数を用いる必要があるため、本稿ではこれを用いなかった。

## 参考文献

- 1) 川村卓, 中村計著 (2007) 徹底分析甲子園戦法。朝日新聞社
- 2) 日本野球機構オフィシャルサイト。第29回オリンピック競技大会日本代表選手公式戦成績  
([http://www.npb.or.jp/alljapan/2008olympic\\_statsnpb\\_0729.html](http://www.npb.or.jp/alljapan/2008olympic_statsnpb_0729.html))
- 3) nikkansports.com.野球競技の結果  
(<http://beijing2008.nikkansports.com/baseball/schedule/top-result.html>) ※2008年9月30日をもって公開停止。
- 4) マイケル・ルイス著, 中山宥訳 (2004) マネー・ボール。株式会社ランダムハウス講談社, 168-169。(原典: Michael Lewis (2003) Moneyball. WritersHouse, LLC.)

# 北京オリンピック・陸上競技の競技達成度

Relative meet performances in the Beijing 2008 Olympics'  
track and field

杉林 孝法

Takanori SUGIBAYASHI



## 1 はじめに

第29回オリンピック競技大会（2008／北京）・陸上競技では、ウサイン・ボルト選手（ジャマイカ）の100m, 200m 両種目での世界記録樹立、4×100mリレーでの日本の銅メダル獲得など、これまで以上に大きな注目を集めた。記録計測種目である陸上競技では、とりわけ世界記録の更新がクローズアップされる。そのため、今回のように鮮烈な世

界新記録が連発した後では、あたかも陸上競技が新時代に突入したかのような印象を与える。

しかし果たして、陸上競技は真に発展し、新時代を迎えたのだろうか。本稿では陸上競技の歴史的発達過程を世界記録の変遷から振り返り、その上で北京オリンピック・陸上競技を競技達成度の観点から考察する。

## 2 世界記録の変遷

図1は、男子全種目における世界記録の変遷を、現在の世界記録を100とした相対値で示したものである。世界記録の更新には陸上競技の普及や強化策、競技会システムの整備、トレーニング方法の開発等、様々な要因が関与しているが、オールウェザートラックの登場や棒高跳の新素材ポール導入のような施設・用具的要因、または砲丸投のオブライエン投法のように新技術の開発による技術的要因によっても飛躍的に更新される場合がある。しかしいずれにしても、種目の歴史が比較的浅い初期段階では上昇勾配は急峻であり、その後緩やかとなる傾向にあると言える。特に最近の20年では、全種目を通して記録の増加率が5%未満であり、歴史的に見れば現在は高度な成熟段階にあると言えよう。

現代のトップレベルの競技者は、各地域または年代の世界大会や欧州を中心としたグランプリ・シリーズ、代表選考試合等の一連の競技会システムへの参加を含めた成熟段階への対応が大きな課題となっている。次項からは、北

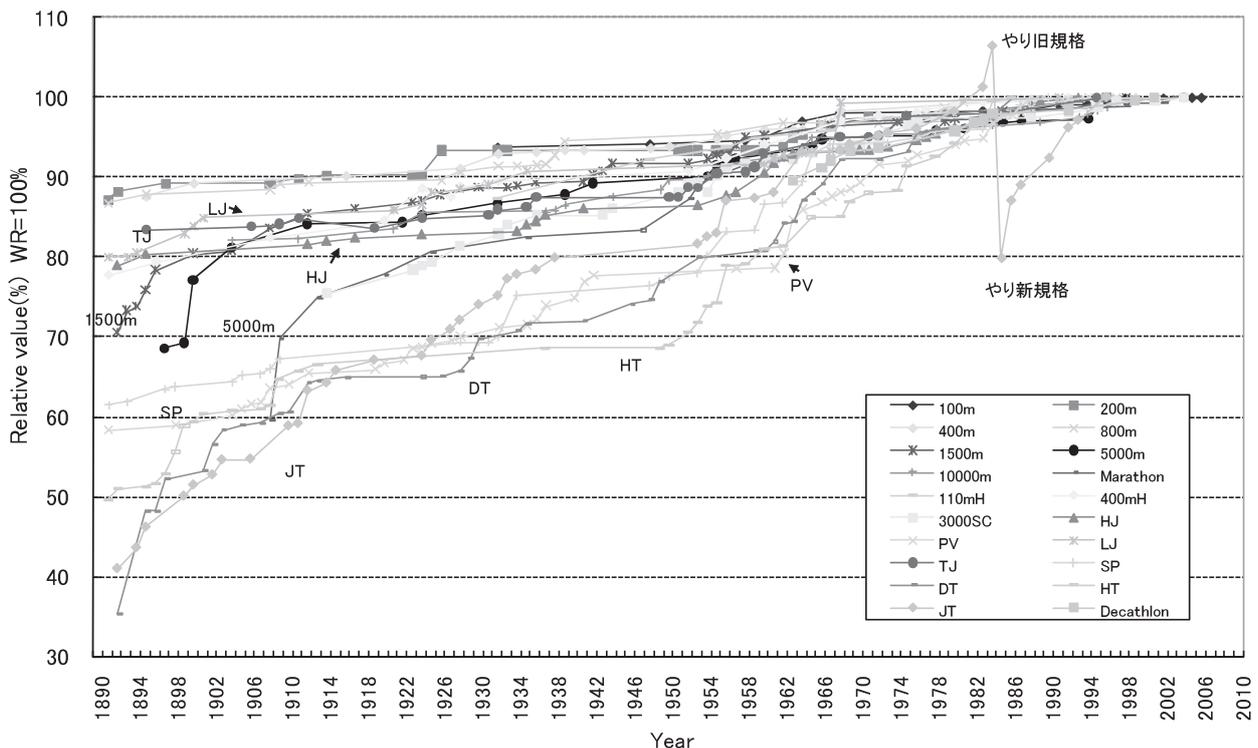


図1 世界新記録の相対値の推移（男子）

表1 北京オリンピックの男子種目における競技達成度 (%)

	100m	200m	110mH	800m	5000m	10000m	4×100mR	走高跳	三段跳	砲丸投	ハンマー投
入賞者	99.8	99.5	99.2	98.6	97.5	98.4	99.5	98.6	99.0	97.2	96.3
全体平均	98.5	98.2	98.8	98.0	95.9	98.1	99.0	95.9	96.7	94.3	93.7

表2 北京オリンピックの男子種目における自己記録更新率

	100m	200m	110mH	800m	5000m	10000m	4×100mR	走高跳	三段跳	砲丸投	ハンマー投
出場人数	80	63	42	58	39	38	16	40	39	44	33
自己記録更新人数	12	5	7	2	0	2	1	2	4	3	0
更新率 (%)	15.0	7.9	16.7	3.4	0.0	5.3	6.3	5.0	10.3	6.8	0.0

京オリンピックにおける競技達成度を振り返り、最高峰の競技会でどのような戦いが行われているのかを見ていきたい。

### 3 北京オリンピックでの競技達成度

本稿では、競技達成度として北京オリンピックでマークした最高記録の自己記録に対する割合 (%) を用いる。データは、北京オリンピック公式サイトおよびIAAF (国際陸上競技連盟) ウェブサイトより得た。

表1は、男子各種目における競技達成度の入賞者平均と全体平均を示している。全体平均では、短距離・障害種目で98.2~98.8%と高い水準となり、中・長距離種目ではそれより若干低く、特に5000mでは95.9%と低い値であった。5000mではレース展開が大きく影響していると思われる。跳躍および投擲種目では全体に低い水準 (93.7~96.7%) となったが、これは技術系種目の特性が影響していると考えられる。一方、入賞者を見てみると、短距離および長距離種目では全体平均よりも1%程度、跳躍・投擲種目では2~3%程度高い値を示し、技術系種目の方が全体平均との差が大きなものとなった。

これらは、1987年ローマ世界選手権での報告 (村木, 1987) とほぼ同様の結果であった。また、村木は1980年モスクワ、1984年ロサンゼルス両オリンピック大会および1983年ヘルシンキ世界選手権でも同様の結果であったと述べている。つまり、高度成熟段階に到達して以降のトップレベル競技会では、入賞できるかどうかは僅か数%の競技達成度の差であると言える。とりわけフィールド競技では、参加標準A記録がほぼ入賞ラインに設定されている (トラック競技では入賞ラインよりやや低い) ため、出場者の多くは「参加資格記録または自己記録を越えるか迫る記録を出せば」入賞が可能な位置にいる。多くの選手が挑んでいるのはその数%の壁であり、いかなる状況においても安定して一定水準以上の記録を出し、歩留りを高く維持することが求められているのである。

### 4 自己記録突破者

では、選手の多くが目標とする「自己記録の更新」は、実際にどの程度成し遂げられているのだろうか。

表2は、男子各種目における自己記録更新者数とその割合を示している。種目間にばらつきがあるものの、今回調べた中で最も更新率の高かった110mHでも16.7%であった。オリンピックに参加するような選手の場合、競技パフォーマンスが高度に高められた段階にあるため、自己記録の更新そのものが非常に困難である。水泳競技ではspeedo社製の水着レーザー・レーサーを着用した選手の世界記録更新が相次いで話題になったが、陸上競技ではそのような事態は考えにくい。記録や順位目標ではなく、「ベストを尽くすこと」が大切である、とする選手が多いのは、このような事情にもよるのだろう。

また、入賞者の競技達成度が最も高かった100m (99.8%) では、入賞者8名中5名が自己記録を更新した一方で、競技達成度の全体平均が低かった5000mおよびハンマー投では誰一人として自己記録を更新できなかった。このように陸上競技であっても種目間で入賞条件は大きく異なるた

表3 男子100mの自己記録更新者

入賞者	記録 (秒)	競技達成度 (%)
Usain Bolt (JAM)	9.69	100.3
Churandy Martina (AHO)	9.93	100.1
Michael Frater (JAM)	9.97	100.3
Richard Thompson (TRI)	9.89	100.4
Walter Dix (USA)	9.91	100.2
非入賞者	記録 (秒)	競技達成度 (%)
Abdullah Al-Sooli (OMA)	10.53	100.2
Ali Shareef (MDV)	11.11	100.5
Gordon Heather (COK)	11.41	101.4
Jesse Tamangrow (PLW)	11.38	100.8
Jurgen Themen (CHN)	10.61	100.9
Mhadjou Youssouf (COM)	10.62	100.6
Okilani Tinilau (TUV)	11.48	100.4

め、試合結果を評価する際にはその点も十分に考慮すべきである。

表3は、男子100mにおける自己記録更新者を入賞者と非入賞者に分けて示したものである。入賞者では5名、非入賞者では7名がそれぞれ自己記録を更新したが、更新率は1名を除き、いずれも1%未満であった。特に、入賞者の記録更新率は大きくとも0.4%であり、Usain Bolt選手の世界新記録も0.3%である。Bolt選手の場合は長身を活かした大きなストライドで走りながら、かつピッチも高いというこれまでにいなかった選手であるという評価や、その特異なキャラクターによってセンセーショナルであったが、トップレベルの選手であれば自己記録を更新すると言っても数字的には極僅かであるという証であるとも言える。

また、非入賞者の記録を見てみると、いずれも入賞の可能性は皆無と言ってもよいレベルであることがわかる(10.53~11.48秒。決勝進出ラインは10.03秒)。北京オリンピックにおける100mの参加標準記録Bが10.28秒であることを考えると、この選手らは全員各国に割り当てられた推薦枠からの出場と見られる。

したがって、自己記録を更新した選手は大きく2通りに分けることができる。つまり、非常に高い競技力を備えながら、さらに記録を僅かながら更新した者と、まだまだ発展途上で、比較的自己記録が容易に出し得る段階にいる者である。また逆に、自己記録としては入賞ラインにいながら、自己記録に届かず予選落ちした選手が大勢いることになる。

## 5 まとめ

本稿では北京オリンピック・陸上競技の男子種目を対象

に、競技達成度の観点から振り返り、高度成熟段階にある現代のオリンピックの分析を試みた。今大会では、一部種目において今後の更なる記録更新を予感させる個別的事例が見られたが、それでも大局的に見ると(比較的新種目を除き)僅か数%の差の中の凌ぎ合いであることに変わりはない。

また、オリンピックと言わず競技会では誰もが自己記録の更新そして入賞を目指すものであるが、個人の中で間違いなく年間の最重要試合と位置づけられるであろうオリンピックでの現実がこのように示された。このことは、高いレベルにある競技者の目標設定や戦術、それに伴うトレーニング構成、競技会の選択、または評価方法に至るまで、今一度再考を迫るものであろう。

本稿は2008年9月26日に行われた金沢星稜大学人間科学部・人間科学会学術講演におけるフォーラム「北京五輪をふりかえる」内で発表された演題「勝敗を決する1%-競技達成度で振り返る陸上競技-」の内容に加筆および修正を加えたものである。

---

## 参考文献

- 1) 村木征人(1987) エリートスポーツ選手のデータ比較-陸上競技スプリンター・ジャンパー-。体育の科学37(12): 912-913
- 2) 北京オリンピック公式ウェブサイト (<http://results.beijing2008.cn/WRM/ENG/Schedule/AT.shtml>)
- 3) IAAF(国際陸上競技連盟)北京オリンピックサイト (<http://www.iaaf.org/oly08/index.html>)

## 第Ⅱ部

### 特別講演『日本が世界と戦うために』

講 師：朝原 宣治（大阪ガス）

コーディネーター：大森重宜（スポーツ学科教授）

司 会：糸川 雅子（北陸放送）



《講演者近影》

第Ⅱ部では、北京オリンピック陸上4×100mリレーの銅メダリスト朝原宣治氏にご登壇頂き、オリンピックについてはもちろんのこと、自身の歴史に陸上競技に対する想いを織り交ぜた独自の世界観について語って頂いた。

以下に、コーディネーターを務めた大森重宜スポーツ学科教授や司会の糸川雅子アナウンサーとの対談録を、一部抜粋した形で記す。

#### 【朝原宣治氏プロフィール】

1972年生まれ。大阪ガス所属。北京オリンピック陸上男子4×100mリレー・銅メダリスト。

高校進学後に陸上を始め、当初は走幅跳を専門としていたが、後に100mに専念。世界選手権に6度、オリンピックに4度出場し、1996年のアトランタオリンピック、1997年（アテネ）、2001年（エドモントン）2003年（パリ）、2007年（大阪）の世界選手権で準決勝に進出している。日本人として初めて10秒1台、10秒0台を記録するなど日本記録を3回更新。

さらに、4×100mリレーでは常にナショナル・チームのアンカーを任されるなど、日本短距離界のエースとして活躍した。

ドイツやアメリカに練習拠点を置き、海外のレースにも数多く出場するなど、豊富な海外経験を持っている。

北京オリンピック終了後、引退を表明し、本フォーラム開催の3日前に引退レースを行った。100mベスト記録は10秒02（日本歴代2位）。

#### —世界に対する“憧れ”

大森：長い競技生活でありましたが、それを支えてきたものは何だったのでしょうか。

朝原：家庭や妻、友達だったりしますが、自分の中では「向上心」が僕を一番掻き立てたと思います。

大森：向上心が探究心や意欲などを高めてくれたのでしょうか。

朝原：そうですね。

大森：そんな朝原さんは大学を卒業してからドイツに行かれたわけですが、なぜドイツだったのでしょうか。

朝原：本当はどこでもよかったのですが、とにかく若い頃から海外に憧れていました。文集などの「将来何の職業に就きたいか」という欄には、「外国に行って仕事をしたい」というように書いていましたね。

通訳、商社マン、ツアーコンダクターなど、とにかく何でもいいから外国に行きたくてしょうがなかったです。

たまたま、僕が陸上で活躍するようになって合宿で海外に行くようになってから、「留学したい!」という気持ちになりました。候補としてはアメリカとドイツがあって、突然、「アメリカに行く」とすごい才能のやつがゴロゴロいる中で、それを倒さなきゃいけない。だからドイツでしっかりしたトレーニングを積んでそれからアメリカに行くことにしたわけです。

大森：その頃、ヨーロッパで一番（足が）速い男は朝原さんでしたよね。

朝原：そうですね。ヨーロッパでは外国人は少なかったですけどね。

大森：当時、ラップ氏というコーチがいましたよね。どの様なこと（練習）をされたのか少しお話していただけますか。

朝原：ラップさんというドイツ人のコーチがつかまりました。ドイツ人というと、緻密な計画で年間を通じてやっていくようなイメージがあったのですが、気分が乗ってくると、どんどんトレーニングを増やしていくコーチでした。練習をしてもしても終わらないという時期がありましたね。合宿でポルトガルなどに行った際には、砂浜での練習がほんとに嫌で嫌で。しかし、噂ではキューバ人のほとんどが冬季練習の半分を砂浜で行うと聞いていたので、ラップさんに「このままじゃ、キューバ人になっちゃうよ。」と言ったのを覚えています。

## 一常に“一步高いレベル”へと

大森：オリンピックや世界選手権は、もちろん陸上においても大きな大会の1つですが、「グランプリ」というヨーロッパを転戦して行うレースにおいて、朝原さんの経験には、日本人が「どうやったら世界で勝ち抜くことができるか」というヒントが隠されている気がするのです。

朝原：僕が、世界を目指し始めたのは遅かったですね。大学3年生の時に初めて日本記録の“10秒19”を出しましたが、その時はまだ走り幅跳びを専門にしていました。

当時は、100mでオリンピックにいこうという気持ちは全くなく、そのままドイツに飛びました。そのうちドイツで速くなって行って、1996年のアトランタオリンピック選考会で“10秒14”という日本記録をもう一度出したわけですが、その時の“10秒14”と以前に出した“10秒19”では、同じ日本記録でも僕にとって全く違う価値のものでした。

“10秒19”は、たまたま出た記録。力以上のものが出てしまった。“10秒14”の時は僕の力がそのまま出せたという記録でしたので、そこでやっと世界に目が向き始めました。

まだその時は、それくらいのスピードで走れるなら走り幅跳びで勝負をしようと思っていたのですね。

しかし、その年のアトランタオリンピックの準決勝で思ったことは、準決勝に残って満足はしたけれども、自分が本当にしたいことは4年に1度活躍するのではなく、1年を通して世界のトップレベルに触れ、共にグランプリを回って、グランプリファイナルで勝負をするということが競技者として一番強い意識だったんです。

オリンピック以外のところでも、世界はずっと動いていて、トップの人の顔ぶれはずっと一緒なのです。その彼らと一緒に旅をしておかないとオリンピックや世界陸上の本番では勝負できないし、オリンピックや世界陸上は“こなす”という状態でなければ、なかなか世界とは戦えないなという考えでやってきました。

大森：私たちがドイツのハンブルクで合宿を行った際に、ドイツ語ペラペラの朝原さんにドイツ語の文章を作ってもらいました。それくらい文武両道でドイツに馴染んでいらっしやいましたよね。

朝原：そうですね。そうじゃないとやっていけないかったで

す。と、いうのも単独でドイツへ渡り、全く言葉もわからない場所で生活するのも大変なのに、強くなれないといけないという想いがありました。

でも、会社側からお金を貰っているので絶対に妥協して帰れないという意識があり、死ぬ気でドイツでやっていかないとはいけませんでした。そうなる、自ずとドイツ人のグループに入って、同じ物を食べて、同じ練習をして、同じ合宿地に行き、という生活をしたわけです。その時は、日本陸連の方々にはご迷惑をかけたと思いますが、そうでもしないと海外に馴染むことは難しかったと思います。

大森：なるほど。世界に挑戦するという事は、世界に立ち向かわなければいけないわけですね。

朝原：そうですね。それはもう決定的なことですね。

## 一陸上競技との“出会い”

大森：その朝原さんのベースについてお聞きしたいと思いますが、元々はハンドボールをされていたんですよね。

朝原：はい。中学校の時に3年間やっていました。

大森：それが、なぜ、陸上競技に変わったのでしょうか。

朝原：ハンドボールという競技はすごくハードなスポーツで、スパルタな練習の厳しい部活動でした。3年間水も飲んじゃいけないようなド根性の、笑ってはいけない、話してはいけないようなものすごい部活動でした。

そんな苦しい部活動が、中学生の時はめちゃくちゃ嫌でコーチも怖かったですよ。そのコーチの指示通りに動いていたんです。それが3年間も続いて。ハンドボールは「もうやってられない！」という感じになりました。

それから高校に入り、違う部活動にしようと思ったのですが、まだ陸上をやるうとは思ってなくて、実はサッカーがしたかったです。中学校の時もサッカーをしたかったけれども、サッカー部がなくて、たまたまハンドボール部に入りました。高校の時もまだ忘れられなくて、一度サッカー部に仮入部までしたけども、自分の中で、何かしっくりきませんでした。「この部活動ちょっと違うな。」と思っていた時に、陸上の先生に誘われたり、中学校の時活躍していたクラスメイトが居たりということが、陸上を始めるきっかけとなりました。

そうすると、それはまあ、「爽やか」でみんな「楽

しそう」で先輩後輩が「仲良さそう」で「キラキラ」していたわけです。それで「陸上部っていいな」と思って入部を決めました。

糸川：ちなみに、今同じように陸上をしている皆さんが、今後、陸上で生活していくことは可能でしょうか。

朝原：うーん…難しそうですね。まあ、ほんとにトップの選手は何億とか稼ぐでしょう。ただ、北京オリンピックをみてもわかるように、なかなか日本人で100mや200mを転戦して、それだけのお金で生計を立てるとするのは、現状、とても難しいですね。

ただ、もうちょっと時代の流れを待って日本人が強くなった時には、それも可能だと思います。今は実業団やその他のスポンサーが、選手に付いてサポートすることがまだ陸上には合っていると思います。少し残念ではありますが。

大森：長い陸上競技生活の朝原さんですが、ぜひここで、速く走るための“コツ”みたいなものをお聞きしてみたいですね。

朝原さんと一緒に行ったヨーロッパ合宿等で、ジョギングしている姿を見て「この人は日本人じゃないな」というような感覚を持ったのですよ。骨盤の使い方が少し他の人とは違うような気がして、物凄いいヒントを得ることができました。“朝原仮説”は僕にとってとっても面白かったです。

朝原：走る際に地面に着くところは、足の部分じゃないですか。だから足をどうしても意識しちゃうわけですよ。そうしているうちは、こて先走りになっちゃうわけですよ。大きい力が出せない。骨盤をうまく動かせていないので中心から力が出ない。

僕が早く走れるようになってきたのは、足先ではなく中心をどう使うかをずっと意識して走るようになってからです。

## —原動力となった“チームワーク”

大森：こういう言葉があります。「Power of Follow」。

これは、なぜか知らないけれども力を発揮してしまう。この人にこんな力があつたのか、あるいは、このチームになぜこんな事が出来ちゃったのだろうということを指すわけですが、今回北京オリンピックで銅メダルが獲れたということは日本チームに「Power of Follow」が生まれたんじゃないのかなと私は思うんです。その中心人物が朝原さんだったと思うのですが、どうでしょうか。

朝原：まあ、そうだったら大変嬉しいことですね。

1つ面白い話があって、銅メダルを獲った後に、1位のジャマイカと2位のトリニダード・トバゴと日本チームがプレスカンファレンスに連れていかれました。各国の記者が集まっているところで、ほとんど日本のほうには来なくて、ジャマイカばかり取材していましたね。ジャマイカチームは世界記録を出したので、「速さの秘密を教えて」と質問されました。その時、答えていた内容は、「個人で速いということもあるけれど俺たちはいつも友達だ」と言っていたのです。僕らからすると、「みんな足が速いし10秒台だからそりゃ世界記録も出るよ」と思っていたわけですが、その彼らでさえ、自分たちは友達であり、すごいチームワークがあるんだということを知って驚きました。

日本チームにも信頼関係はあるし、強いチームワークがありました。世界陸上からずっと一緒でしたし、僕と末續（慎吾）君の場合シドニーから一緒にやってきたわけですから。今回のことを考えると個々の力以上のものが、一走から徐々に加速する、科学的には証明できない、何かすごく重たいものを僕は最終的に受けるということになったと思います。

その“力”を使って僕は、「走っている」ということをすごく感じましたね。



《対談の様子》

## —“引退”を迎えて

糸川：今回、北京オリンピックを終えて、競技生活から引退されたわけですが、以前にもアテネオリンピック、大阪世界陸上あたりで引退が騒がれていました。

なぜ今回まで、現役を続けられたのでしょうか。

朝原：アテネオリンピックが終わってから、大体、オリンピックで頭の中が回っているんですよ。4年が過

ぎる毎に抜け殻状態になってしまうんです。

アテネオリンピックの時、僕は32歳でした。32歳というと、もう身体的にも辛くなってきて、オリンピックも3回目を迎えたわけです。「もうこれ以上いいかな」と思って、次の世界陸上のヘルシンキ大会に出場しましたが、でもやっぱり駄目なんですよ。もう、冬季練習から力が入らなくてヘルシンキでヨーロッパを回った時も全く緊張感がなく、すごく速い選手の横に並んでも、全く闘争心もなく走っていました。「もう陸上競技が遠ざかってしまって終わりだな」と思っていました。その時、怪我をしてしまったんですが、大阪（世界陸上2007）にみんな来て下さいという垂れ幕が閉会式の時にあったんです。地元であることは知っていましたが、それを見て、明確に出てみたいという気持ちが湧いてきました。それで大阪世界陸上まで頑張りましたね。

糸川：大阪の時の涙から、ファンの皆さんは「お疲れ様」と思ったと思いますが、それから北京オリンピックまでの精神力・気力については、どのような状態だったのですか。

朝原：大阪の後は、僕も終わったと思いましたしね。すっきりして、大歓声の中を走って。

すっきりしたなって思っていました。なぜかシーズンが終わった後に、「これでいいのかな。」という気持ちが沸々と沸いてきたんです。頭で考えているというよりは、本能的な感じですね。

大森：今はどうでしょうか。

朝原：今はもうないですね。すっきりとした気持ちです。

## —自身に見つけた“人生訓”

朝原：僕は“流れ”っていうものがすごく大事なことだと、今回のオリンピックを終えて、つくづく感じました。

中学生の時にしていたハンドボール。ハンドボールはコートの中を行ったり来たりしますよね。攻めたり守ったりするわけですが、互角ぐらいのチームでも一方に点が入り始めたら、ものすごい勢いで入る時と、いくら頑張ってもバンバン点を入れられるっていう時と、そのチームによって“流れ”っていうものがあるわけです。

それは、いくらこっちが頑張ってもなかなか変えられなくて、でも踏ん張らなくてはいけません。

長い陸上競技生活を振り返ると、そのことを本当によく感じます。順調にずっと来ていた時もあったのですが、1997年という年が僕にとってはすごく良

い年であり、その翌年に怪我をしちゃいまして、その時から2年間、結局怪我続きでした。最終的に左足の踝の骨を骨折して全く走れなくなっちゃったわけです。

その2年間は何をしても、もがいても、もがいても、なかなかそこから這いあがれなくて苦しんでいました。しかし、2000年にシドニーオリンピックが控えていたので、それに向かって「絶対にこの流れを変えない！」と、気持ちを切り替えました。

チャンスを待つというよりも、苦しい時期でも我慢し、切り抜けば、きっと次は良い流れが来ると信じていました。

骨折したけれども一からやり直して、シドニーの切符を手に入れたのです。シドニーの切符というのは100m個人ではなく、リレーで代表に選ばれることになりました。それでまた決勝の舞台に上ってきたんですね。だから、もし、怪我をしてどん底の時に諦めてしまっていたら、シドニーの切符はなかったわけです。

そこからまた、自分の新しい陸上人生が始まりました。そこで、もう一度同じようなことが訪れたのが世界陸上大阪大会の前です。先ほどお話したように、アテネの時に燃え尽きて、ヘルシンキで次の年にも世界陸上に出たけれども、もう何も興奮しなくなって、正直、「ああ、もうやめちゃっていいじゃないか」と思っていました。しかし、大阪がまた見えてきた途端に、「ああ、やっぱり大阪で選手として頑張らなきゃいけないな」って思い、もう一度頑張ろうと思いました。

そうすると、何か流れがガラッと変わり始めたなというのが2006年の冬季練習を始めた時ぐらいでした。

初めは「あーもう全然ダメかも」って思いつつ、「良い状態に戻さなくてはいけない」と思いながらやっていたのですが、ぼろっと、ある転機が訪れて、自分の中で流れがずっと変わったような地点だったんです。このように、そこまでずっと我慢すると、パッと開けるっていうのが僕の中には多々あって、結果、大阪は無事大歓声に包まれて終わりました。

その後もやめようと思いましたが、自分の魂というか、競技者としての“最後の気持ち”みたいなものが出てきて、それが北京オリンピックまで続いていきました。

北京オリンピックは、自分の陸上人生を納得させる大会だと思っていました。「納得させる」っていうのは、結果ではなく、「もうこれ以上、陸上競技に

はやり残したことはないです」っていうことにするための大会として位置づけていたんです。

その頃からの“覚悟”によって，“流れ”ができ、今回の銅メダルを獲得できたのではないかなと思いますね。

陸上選手の皆さんも、様々なスポーツをされている皆さんもいると思いますが、何か悩んだ時にずっとそのままの状態にいるってことはないと思います。

「悪い流れのあとには、良いことが必ず来る」ってポジティブに考えると、何事もスムーズに行くのではないかなっていうのを僕は長い競技生活で得ることができました。

それは、自分自身、これから始まる新しく長い人生の教訓ともいえるべきことかも知れません。

文責：神野賢治（スポーツ学科助教）